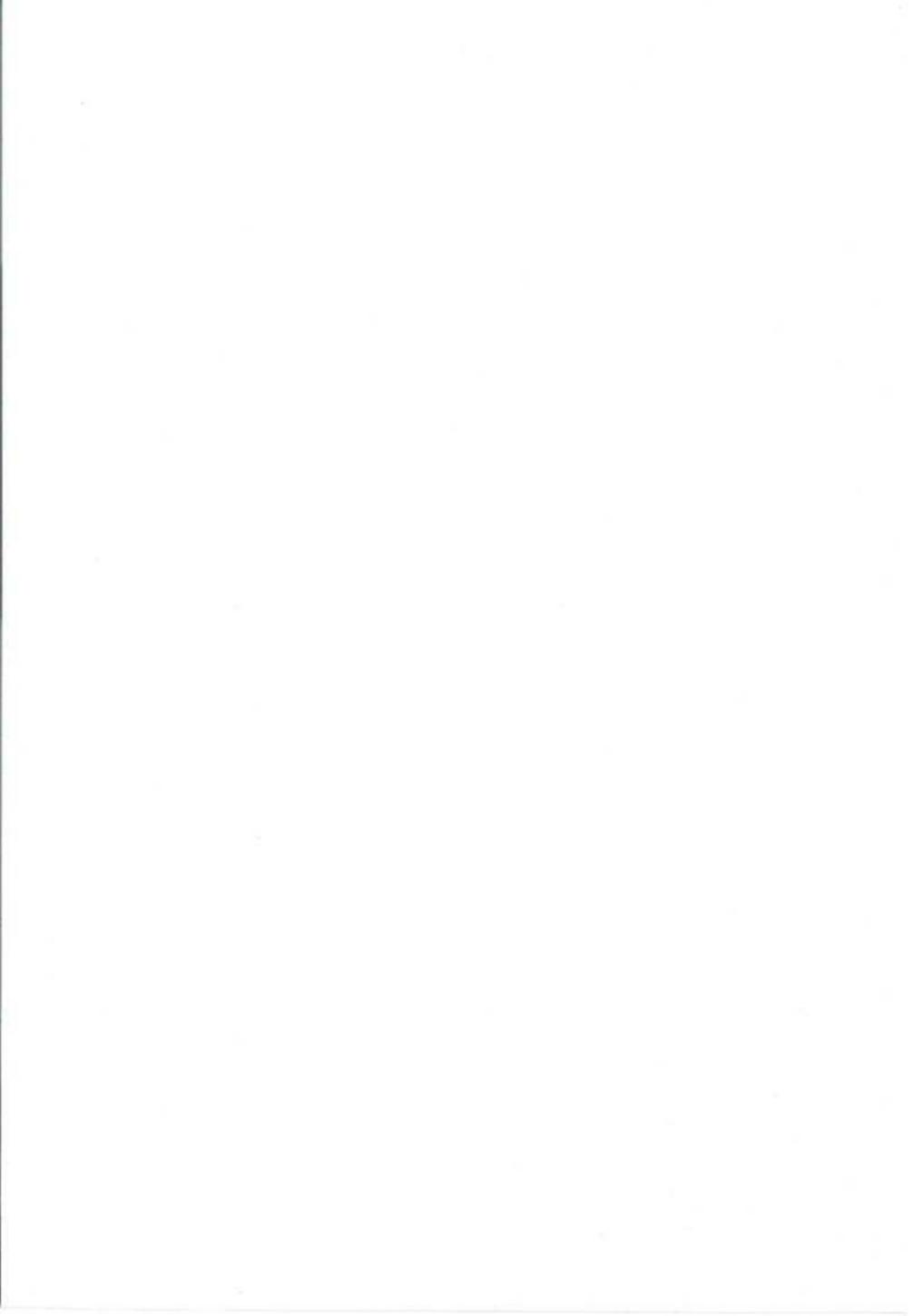


# 宮島 1 砂金採掘跡

一般国道230号今金町国縫道路工事に伴う発掘調査報告書

2009

北海道今金町教育委員会



## 例　　言

- 1 本書は北海道瀬棚郡今金町4396林班わ小班に所在する宮島1砂金採掘跡（北海道教育委員会遺跡登載番号C-10-59）の一般国道230号今金町国縫道路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本調査は国土交通省北海道開発局函館開発建設部より委託を受け、今金町教育委員会が行った。
- 3 本書の作成・編集は宮本雅通が行った。
- 4 現地での写真撮影は宮本雅通が行った。
- 5 航空写真および測量は株式会社シン技術コンサルに委託した。
- 6 現地調査に伴う下草刈りは下記の方々が従事した。  
上田浩匡、白井宣昭、堂前 守、本田恭幸
- 7 記録図面および写真については、今金町教育委員会が保管している。
- 8 調査にあたり下記の機関・各位よりご指導・ご協力をいただきました。記してお礼申し上げます。  
北海道教育委員会、知内町教育委員会、松前町教育委員会、八雲町教育委員会、北海道砂金史研究会、今金町歴史をたどる会、美利河老人クラブ、今金町公営施設課  
長沼 孝、寺崎康史、高橋豊彦、前田正憲、三浦孝一、上野保男、毛利直吉、澤谷鉄矢、  
米山正二、宗像久子、岸本義仁、秋山道子、義鳥 愛、山崎良子

## 目 次

### 例 言

I 調査の概要.....	1
1. 調査要項.....	1
2. 調査体制.....	1
3. 調査に至る経緯.....	1
4. 遺跡の位置と周辺の遺跡.....	1
5. 調査の概要.....	4
II 調査の成果.....	6
1. 全体の状況.....	6
2. 遺構.....	6
III まとめ.....	11
主要参考文献.....	11
写真図版	

## 挿 図 目 次

図 1 遺跡の位置及び周辺の遺跡.....	2
図 2 調査区の位置.....	4
図 3 調査区全体図.....	5
図 4 調査区平面図.....	7 ~ 8
図 5 調査区断面図.....	9

## 写 真 図 版

図版 1 調査区全景.....	12
図版 2 水路 - 1 .....	13
図版 3 採取場・石積・水路 - 4 .....	14
図版 4 石垣 - 1 ・堰 .....	15
図版 5 水路 - 1 ・堰・採取場 - 1 ・石垣 - 2 .....	16

# I 調査の概要

## 1 調査要項

事業名	一般国道230号今金町国縫道路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
委託者	国土交通省北海道開発局函館開発建設部
受託者	今金町教育委員会
遺跡名	宮島1砂金採掘跡
所在地	瀬棚郡今金町4396林班わ小班
調査面積	1,800m <sup>2</sup>
調査期間	平成21年7月8日～平成22年2月26日（現地調査8月11日～8月28日）

## 2 調査体制

調査主体者	教 育 長	中島光弘
主 管	事 務 局 長	勝山英敏
	事 務 局 次 長	小林洋伸
調査担当者	社会教育グループ係長	宮本雅通（学芸員）

## 3 調査に至る経緯

一般国道230号は、札幌市から長万部等を経由してせたな町に至る延長約200kmの幹線道路で、このうち長万部町国縫からせたな町にかけては地域高規格道路「渡島半島横断道路」に位置づけられている。函館開発建設部では陰路区間の解消や物流の効率化、観光地へのアクセス向上等を目的に、国縫から今金町花石にかけての延長14.9km区間を「国縫道路」とし、その整備工事を平成11年度より進めている。

当初、工事用地内には埋蔵文化財包蔵地は知られていなかったが、今金町教育委員会が平成18年12月に工事該当範囲について表面観察を行ったところ、水路や石垣状の遺構を発見し、砂金採掘跡と判断した。翌月、遺跡の発見届を北海道教育委員会へ提出、同時に埋蔵文化財包蔵地「宮島1砂金採掘跡」として登載した。また、後志利別川を挟んだ対岸で同じく踏査の際に確認した「花石1砂金採掘跡」についても同時に登載した。

平成19年6月、開発建設部から埋蔵文化財保護のための事前協議書が北海道教育委員会へ提出された。遺跡の保存について開発建設部・道教委・町教委との間で協議したものの、工事計画の変更による現状保存が困難であることから、記録保存のための調査を行うこととなった。

なお、調査は対象区域内に繁茂する樹木の伐採を伴うことから、調査期間を道路工事が行われる直前の時期とし、調査に伴う負担軽減を図った。

## 4 遺跡の位置と周辺の遺跡

今金町は北海道南西部渡島半島中央部に位置し、東西27.5km、南北35.3km、面積568.14km<sup>2</sup>、人口約6,200人の農業を基幹産業とする町である。遺跡の所在する宮島地区は町の北東部にあたり、そのほとんどは山林で人家は少なく、平成21年末時点で戸数は2戸、人口は7名である。

宮島の地名の由来は、開拓の祖である宮島惣八によるものとされ、それまでは南隣の花石地区とともに「珍古辺（チンコベ）」と呼ばれていた。

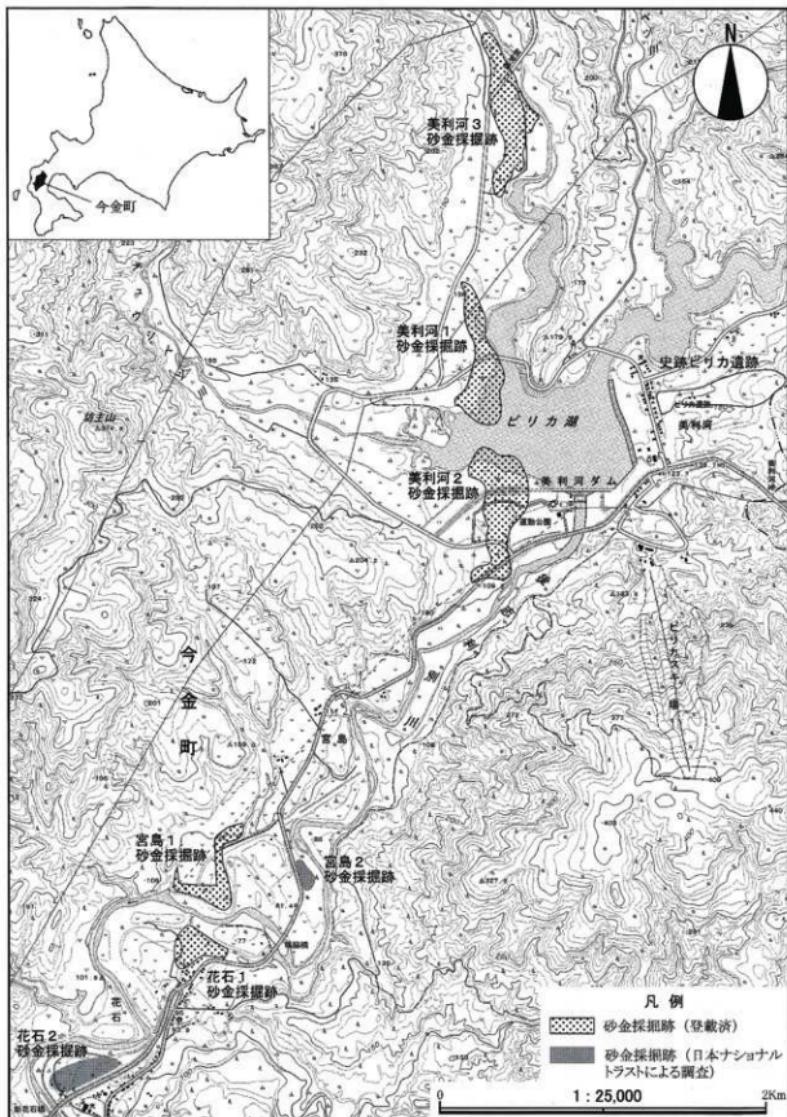


図1 遺跡の位置及び周辺の遺跡 (国土地理院発行2万5千分の1地形図  
「美利河」より転用)

町の中心を流れる後志利別川は、その源流部に金等の金属鉱物を含む花崗岩類が広く分布し、川によって浸食された砂礫層が上流部に広く堆積するという、砂金産出地としては絶好の自然条件を備えている（北海道埋蔵文化財センター 1989）。この流域における砂金採掘は、江戸時代寛永年間、間を経て幕末の安政年間、明治10～20年代に、いわゆる砂金ブームが起きたことが知られており、美利河から種川地区にかけての川沿いには、砂金採掘に特有の石垣や水路跡が数多く残されている（矢野 1988、日本ナショナルトラスト 1996）。しかし、これらの採掘方法や収量などについては、史料等の記録が乏しく、実態は不明である。

今金町における砂金採掘跡の本格的な調査はこれまでに4回行われた。昭和56年の美利河2砂金採掘跡および昭和63年の美利河1砂金採掘跡の調査は、いずれもダム建設に伴う大規模なもので、河川合流点付近の砂金採掘跡の全容が明らかにされた（北海道埋蔵文化財センター 1989）。次いで、平成2年には道路建設に伴い美利河3砂金採掘跡の調査が行われた（今金町教育委員会 1991）。平成7年には観光資源保護調査の一環として、日本ナショナルトラストにより美利河・花石周辺での分布調査や砂金採掘の聞き取り調査が行われている（日本ナショナルトラスト 1996）。図1は、これまでの調査で報告された砂金採掘跡を示したものであるが、砂金採掘跡そのものはこの流域一帯に無数にみることができる。

本遺跡はこれまでの調査では未確認の地点であったが、このたびの踏査により、後志利別川右岸段丘面上に広く分布していることが明らかとなった（図2）。

遺跡一帯の現況は下草に笹が生えるブナを中心とする天然林であるが、遺跡中央から北側に広がる農地については、昭和44年に山林から畑へと地目変更されており、この頃より農地整備が行われるとともに、本来存在していたであろう一連の砂金採掘跡も消滅したと考えられる。また、遺跡の中央を縦断するように敷設される道路工事区间は、旧国鉄瀬棚線跡地をほぼそのまま利用するものであり、瀬棚線の国境一花石間が開通したとされる昭和4年頃には、この瀬棚線の敷設工事により、幅約15m・長さ約400mの区域がすでに消滅していたと考えられる。

表1 今金町内における砂金採掘跡一覧

登載番号	名称	現地調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	文献
14	美利河1砂金採掘跡	昭和63年5月9日～6月20日	110,166	北海道埋蔵文化財センター 1989
15	美利河2砂金採掘跡	昭和56年5月6日～6月30日	66,880	北海道埋蔵文化財センター 1989
55	美利河3砂金採掘跡	平成2年9月3日～9月14日	6,580	今金町教育委員会 1991
58	花石1砂金採掘跡	平成7年11月2日～11月5日	—	日本ナショナルトラスト 1996
59	宮島1砂金採掘跡	平成21年8月11日～8月28日	1,800	本報告書
	宮島2砂金採掘跡※	平成7年11月2日～11月5日	—	日本ナショナルトラスト 1996
	花石2砂金採掘跡	平成7年11月2日～11月5日	—	日本ナショナルトラスト 1996

※ナショナルトラストによる報告では「宮島1砂金採掘跡」と表記されている地点である。本報告では、混乱を避けるため「宮島2砂金採掘跡」と表記する。

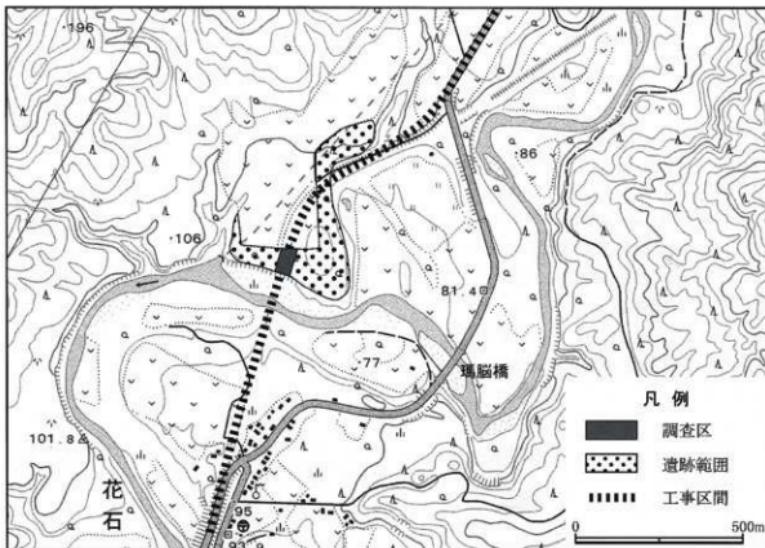


図2 調査区の位置

(国土地理院発行2万5千分の1地形図  
「美利河」より転用)

## 5 調査の概要

調査区は、道路用地となる範囲を対象として設定した（図3）。面積は1,800m<sup>2</sup>である。グリッド表示は世界測地系に則ったもので、20m単位で調査区全域に表示している。グリッド名は便宜上、東西方向にアルファベット、南北方向にアラビア数字を付し呼称する。なお、基点となるA-1交点の座標値は下記のとおりである。

$$X = -172,280.000 \text{m} \quad Y = -6,740.000 \text{m}$$

北緯42° 26' 47.84113" 東経140° 10' 17.83007" (平面直角座標系第VI系による)

調査は、調査区全域についての遺構の残存状況を把握することを目的とし、詳細な地形面測量と写真によって記録するものとした。

測量に先立ち、8月11日から17日まで調査区内の笹伐りを人力により行った。その後、表面を覆っている葉や朽木等を取り除き、遺構面を露出させることに努めた。測量は基準点測量から原図作成までを株式会社シン技術コンサルに委託し、調査員の指示のもと、レーザー三次元測量機器（ニコン・トリプル社GS200）を用いて精密な測量を行った。空中写真測量及び上空からの遺跡全景の撮影はラジコンヘリにより行った。遺構の詳細な写真記録には、6×7判と35mm判銀塩カメラを用いて撮影し、それぞれカラーリバーサルとモノクロネガを併用した。

図面作成は、業者が作成した原図データを图形描画ソフト（アドビ社イラストレーターCS）によって編集し、原稿とした。主要平面図（図4）の等高線は20cmきざみとし、平面図上に遺構の遺存範囲をトーンによって示した。また、石垣や石積等の礎の表示は、人頭大程度の礎は白化したが、拳大以

下の小さな礫は省略し、トーンによる表示及び写真によって記録することとした。

なお、社会教育の観点から広く文化財保護意識を啓発することを目的に、調査終了直後の8月29日、町民を対象とした遺跡見学会を開催し、21名の参加があった。

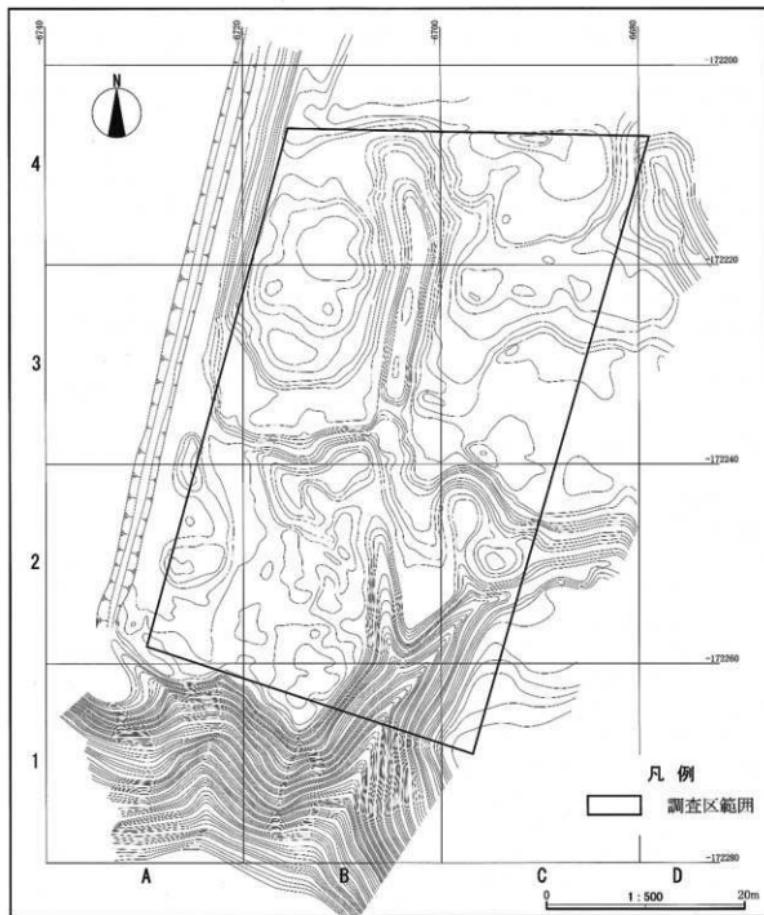


図3 調査区全体図

## II 調査の成果

### 1 全体の状況

遺跡は、後志利別川右岸の段丘面上一帯に分布し、広範囲に及ぶものであるが、先述のとおり農地整備等により大きく削られており、正確な範囲はすでにわからなくなっている（図2）。今回の調査区は遺跡のごく一部分ではあるが、調査区を含めた遺跡の南東部は、現状で水路や石垣状の造構が台地縁辺部へ向かって並行するよう良好に残されている。

調査区内の標高は90～93m、現河床面との比高は15mを測る。調査区内の造構数は、水路4、堰1、採取場2、石垣1、石積2ヶ所である。調査区外の北東寄りで水路1、石垣1ヶ所を確認したので参考までに掲載した（図4）。

造構名についてはこれまでの調査事例にならない、以下のように定義し、使用する（北海道埋蔵文化財センター 1989）。なお、堰としたものは今回の調査で初めて確認された造構である。

**水路** 細長い溝状の造構。採取場へ水を導くものと、採取場で砂礫を洗い流した水を流すものの二つに分けられる。側壁に石垣を伴うことが多い。

**堰** 水路の水流をせき止めるように設けられたダム状の造構。

**採取場** クレーター状の凹地を呈する造構。地山の礫層まで掘削し、砂金を選鉱した場所とみられる。

**石垣** 磚が整然と積み上げられた石垣状の造構。水路の側壁を構成し、両側と片側のみの場合がある。

**石積** 磚が不整形に漫然と積み上げられた造構。不要な磚の捨て場とみられる。

### 2 造構（図4）

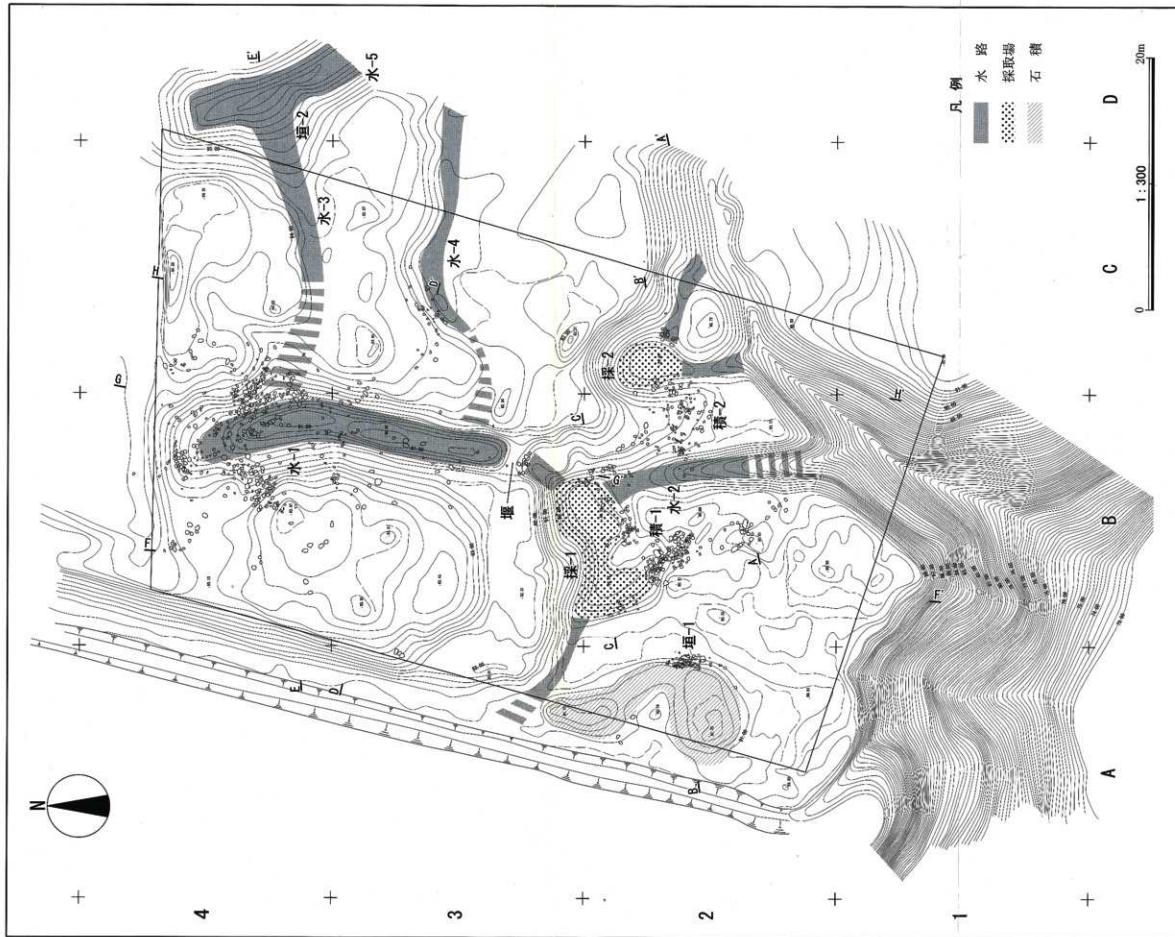
**水路** 水路-1としたものはB 4～B 3区に位置し、現状で長さ約25m、幅は上端で約5m、深さ約2.5mを測り、南北方向に延びる。北側は農地により破壊されており、全長は不明である。南側は堰によって中断されるが、さらに南側の採取場-1へとつながっている。採取場-1へ水を流したものとみられる。水路北寄りの両側には拳大～人頭大程度の磚が集中する区域があり、これらは水路が形成される際に積み上げられたものであろう（図版2）。

水路-2はB 2区に位置し、南北方向に延び、断面V字状を呈する。南側の自然の沢へと連なっており、人為による改変度合を見極めるのは難しいが、自然地形を利用しつつ、採取場1の排水溝としての役割を担っていたものであろう。

水路-3・4はC 4区・C 3区に位置し、東西方向に延び、断面はごく浅い溝状を呈する。南側の側壁の残存状況は良くないが、北側には小規模な石垣状の造構が断続的にみられる。いずれも東側の水路-5と合流していることから、水路-5の支線的な役割をもつたものと推定している。

水路-5は、図面では一部しか掲載できなかったが、D 4区から南西側へ湾曲し、C 2区の自然の沢へとつながっており、現状で長さ約45m、幅は上端で約7.5m、深さ約2mを測る。断面はV字状を呈する。北側は農地により消滅しているが、今回の調査で確認した造構としては最大規模のものである。現状で、水路の両側には整然と積まれた石垣が露出する部分が断続的にみられ、この付近での給排水機能をもつた中心的な水路としての役割が推定される。

图 4 调查区平面图



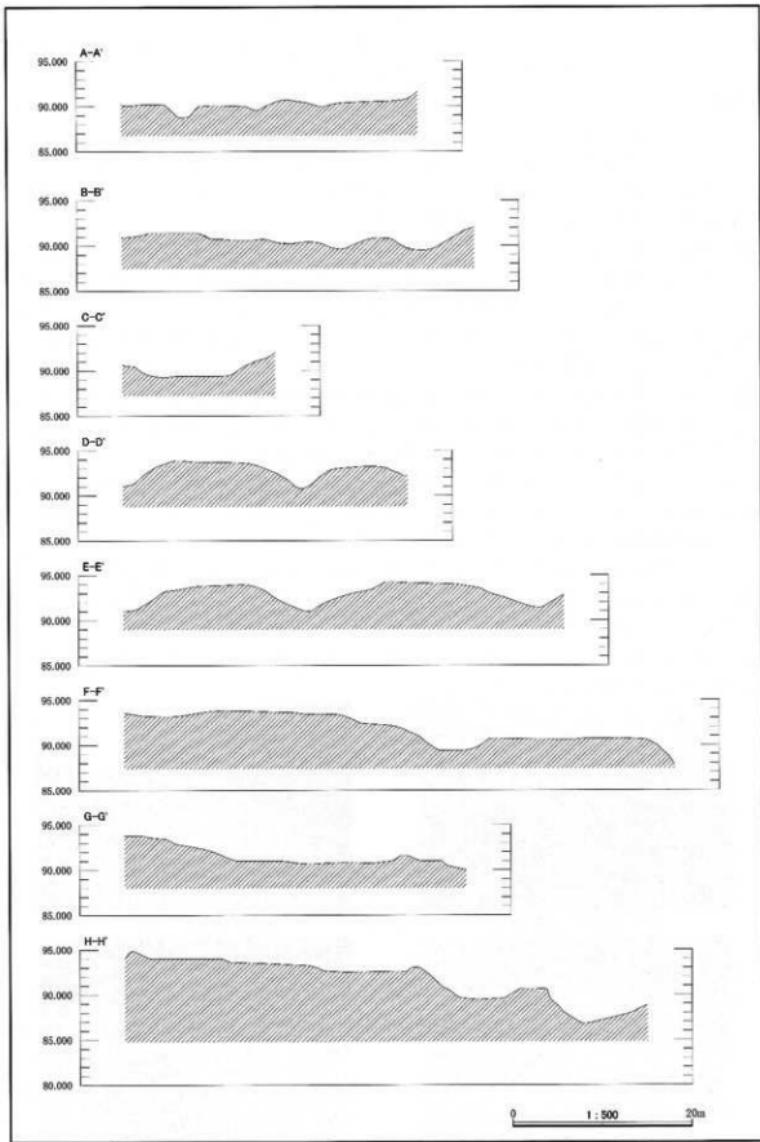


図5 調査区断面図

**堰** 水路－1の南端に位置し、高さ0.8m、厚さ約2.5mを測る。笹の根等の被覆物を除去したところ、これは人頭大前後の礫の積み上げによって形成されていることが判明した（図版4・5）。採取場－1への水を堰き止めるために設けられたものとみるのが自然であろう。

**採取場** 採取場－1はB2区に位置し、2つの脩円形の凹地が連結したような形状を呈する。比較的大型の東側のもので、東西6m、南北5m、深さ1.5mを測る。北側の水路－1より給水し、南側の水路－2により排水したものと考えられる。採取場－2はC2区に位置し、径5m程度の円形を呈する。深さは西側平坦面との比高で約1.5m、北側平坦面とでは約3.5mを測る。この東側と南側に小規模な水路状遺構があるため、東から水を引き、南へ流したものとみられる。

**石積** 石積－1は採取場－1の南側一帯に位置し、拳大～人頭大程度の礫が集積している。一部、石垣状に積み上げられたところもみられる。石積－2は採取場－2の西側に位置し、拳大～人頭大程度の礫が集積している。なお、この上面には自然倒木したブナの根が覆っていた。石積によって根が地中に入り込めないため、台風などで倒れやすくなっているもので、このような倒木は近辺の砂金採掘跡でしばしばみられる特徴である。

**石垣** 石垣－1はA2区に位置し、拳大～人頭大程度の礫の積み上げが、高さ約70cm、長さ約6mにわたり、南北に連なって認められる。この石垣の西側一帯にはやや小ぶりな礫が集中する石積となっている。採掘作業の工程上の早い段階に作られた石垣の一部と推定している。

石垣－2はD4区に位置する。水路－5の西壁から立ち上がるよう西方向へ延び、水路－3の南側壁面を構成している。人頭大ほどの円礫が5～8段ほど整然と積み上げられており、今回確認した中では最も遺存状態の良い石垣である（図版5）。

本調査区で確認された遺構は、基本的には、北側方面から水を引き、採取場で砂金運鉱を行い、南側の沢（後志利別川）へ水を流したものと判断できる。区域外ではあるものの、東側には中心的な役割を果たしたとみられる水路および石垣が良好に遺存しており、一部自然の沢を利用しつつも、大がかりな採掘作業の産物であることが明らかとなった。ただし、遺跡の北側一帯は消滅しているため、導水路などの水源供給元の状況は不明である。



調査前の状況（南西から）



旧国鉄瀬棚線跡（南から）



レーザー三次元測量の状況



遺跡見学会

### III　まとめ

今金町における砂金採掘跡の本格的な調査は、これまで美利河地区を中心としたものであり、美利河以外での調査は今回が初めてとなる。以前の調査に比べ極めて小範囲ではあったが、砂金採掘に特有の遺構（水路、石垣、採取場等）を確認した。これらは、水気のない台地上において遠方より水路を引き、礫層を根こそぎ洗い流すという大がかりな砂金採掘法がとられたことを示しており、美利河の各砂金採掘跡と同じ状況を呈している。このことから、美利河から約3km離れた下流においても大規模な砂金採掘が及んでいたことが明らかとなったとともに、本遺跡は後志利別川流域における大がかりな砂金開発の一環としての位置づけが与えられよう。

本遺跡が残された年代については、遺物の発見がなく明確な根拠を示すことはできないが、美利河1・2砂金採掘跡に関しては、北海道埋蔵文化財センターの調査報告において関連史料に基づき詳しい検討がなされている。これによると、調査箇所が安政年間（1854～59年）に描かれた「クンナ井砂金山絵図」に示されている稼働箇所には該当しない点、明治期以降は大規模かつ組織的な採掘は行われていない点から、江戸時代初期松前藩によるものとの見解が出されている（北海道埋蔵文化財センター 1989）。また、年代を示唆する極めて貴重な史料としては、地質調査のために来道した幕末のW.P.ブレーク、明治期のH.S.マンローによる報告が挙げられる（彌永 1981、矢野 1988ほか）。美利河周辺の砂金採掘跡について詳しく観察した彼らの報告には、台地上に残された石垣や採取場、導水路、遺構上を覆うように生育する巨木等についての記述がみられ、これらも江戸時代初期の所産とする有力な根拠といえる。

松前藩による砂金採掘の歴史は、元和年間に始まり、寛永年間には渡島半島を北上、寛永8（1631）年に島牧、同10（1633）年に日高シブチャリ、同12（1635）年には十勝や夕張など、内陸部にまで及び、シャクシャインの戦い（1669年）までの50年余り続いたことが知られている（彌永 1981ほか）。この時期の砂金採掘法は、いわゆる「大流し」と呼ばれる台地上での大がかりな方法が主にとられたようで、松前や大千軒岳周辺にはそのような遺構が数多く確認されている（矢野 1988ほか）。明確な記録はないものの、後志利別川流域もこの時期に同様の方法で開発されたものとみられ、その一つが宮島1砂金採掘跡として残されたものであろう。

今後の課題として、北海道における砂金採取史の観点から後志利別川流域における砂金採掘跡の実態把握、そして年代特定につながる遺物の発見に努めたい。

#### 主要参考文献

- 今金町教育委員会編 1991『美利河3砂金採掘跡』今金町文化財調査報告3  
今金町役場 1991『改訂 今金町史』上巻  
岡孝雄・三谷勝利 1981『今金町の地質』今金町  
日本ナショナルトラスト編 1996『美利河・花石の砂金採掘跡』  
北海道開拓記念館 1976『山の民俗 砂金掘り』資料解説シリーズNo.3  
北海道埋蔵文化財センター編 1989『今金町美利河1・2砂金採掘跡』北理調報第59集  
彌永芳子 1981『えぞ地の砂金』北海道ライブラー17 北海道出版企画センター  
彌永芳子 1984『北海道の砂金と砂白金』みやま書房  
矢野牧夫 1988『黄金郷への旅—北の砂金物語—』道新選書7 北海道新聞社  
脇とよ 1956『砂金掘り物語』ダビット社

写真図版 1



1 調査区全景（北から）



2 調査区全景（南から）

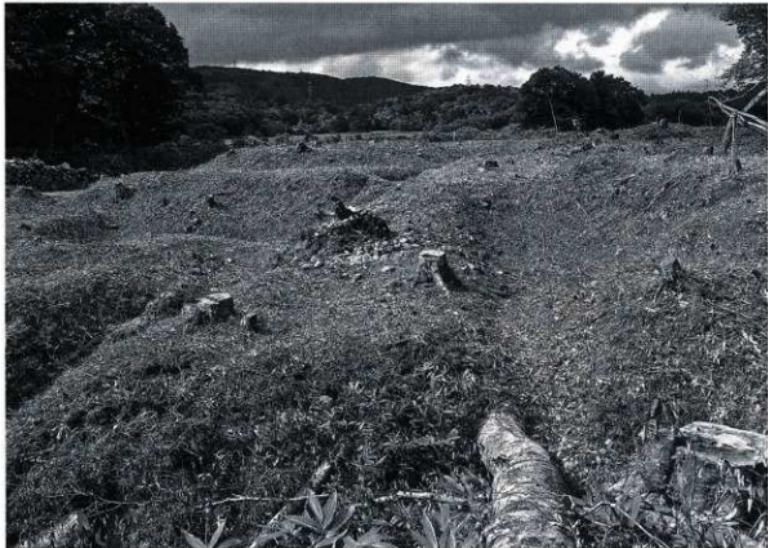


3 水路-1 (北から)



4 水路-1 (南から)

写真図版 3



5 採取場-2・石積-2（南東から）



6 水路-4（南から）



7 石垣－1（東から）



8 壁（南から）

写真図版 5



9 水路 - 1・堰 (南東から)



10 採取場 - 1 (南から)



11 石垣 - 2 (北東から)

## 報告書抄録

ふりがな	みやじまいちさきんさいくつあと							
書名	宮島1砂金採掘跡							
副書名	一般国道230号今金町国縫道路工事に伴う発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	今金町文化財調査報告							
シリーズ番号	6							
編著者名	宮本雅通							
編集機関	今金町教育委員会							
所在地	〒049-4308 北海道瀬棚郡今金町字今金48番地1 TEL 0137-82-3488							
発行年月日	2010年2月26日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
みやじまいちさきん 宮島1砂金 採掘跡	瀬棚郡 今金町 4396林 班わ 小班	C-10	59	42° 26' 49"	140° 10' 19"	20090811 20090828	1,800m <sup>2</sup>	道路工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
宮島1砂金 採掘跡	鉱物 採掘跡	江戸時代	水路 採取場 石垣 堰	なし	大規模な砂金採掘跡 を確認した。			

## 宮島 1 砂金採掘跡

—一般国道230号今金町国縫道路工事に伴う発掘調査報告書—

平成22年2月26日発行

発 行 今金町教育委員会  
北海道瀬棚郡今金町字今金48番地1  
TEL 0137-82-3488

印 刷 有限会社三和印刷

---